

『サステナ』第11号 特集: サステナ教育

3200字のところ現在約4700字になっています。緑字はカットしてかまいません。緑字は約1400字ありますので、約3300字にはなります。

文化に根づいたサステイナビリティと教育

茨城大学教育学部准教授 大辻永 (おおつじひさし)

サステイナビリティをつくる社会装置

同期の一人が、はじめての教授会でこう自己紹介したのを覚えている。「教育学部という誠に総合的な学部赶赴する機会を得まして・・・」。それだけで教授陣の笑みを誘った。教育(学)というのは、そんな柔らかな笑みで捉えるのが一番である。独自の世界があるようっていて、他領域の成果に神経をとがらせ、また、実社会に直結している一方、世間からはすぐに問題視される。ところが多くの議論では、一番大事な個々の「子ども」というポイントが抜け落ち、集団として扱われ、時には意味のない国家のランキング騒動に巻き込まれる。実に、慈しむべき対象である。

教員養成学部の中では、おそらくどの大学でも、伝統的にたたき込まれることがある。「日本のホームレスは新聞が読める、と驚く外国人がいる。それだけ日本の初等教育はしっかりしている」。このことにはいくつかの要因が絡んでおり、より厳密な分析を要するけれども、そう言われると、我が国の初等教育は誇らしく思われる。聴いている学生は恩師の顔を浮かべながら、その意味を再認識し、教師という専門職に近づく自覚を覚えはじめる。

「小学校教育の最大の目標は、読み書きにある」とも言われる。人が人として生きていく上で「ことば」を使って考え、思いつき、感じ、表現する。他者と共生していく上でも「ことば」は必要不可欠である。初等教育が、社会基盤整備の重要な一端を継続的に担っている。教育は「人づくり」という、持続可能性を維持する社会装置の最たるものと見ることが出来る。

基本的なリテラシーについては、教育の世界では伝統的にスリーアールズ(3Rs: reading, writing, arithmetic)とされている。ゴミ問題や生活習慣に絡めて最近言われている3Rs (Reduce, Reuse, Recycle, 他にもいろいろある)の元祖は教育の3Rsであることは、リテラシー、否、雑学として知っておいて損はない。

芸術や科学の教育にしても、パフォーマンスやペーパーテストで高得点を目指すことよりも、そういった世界があると子どもにコミットさせるだけで大いに意味がある。それぞれの文化活動には、理解者が必要でもある。「ものの見方・考え方」を育成することも、目指されるべき大事な教育目標である。個々の概念を積み上げつつ、論理的にものごとを考え、実際に調査・観察・実験する経験を経て、最終的には地球温暖化といった総合的なissueを多面的に理解し、自分なりの行動に移す・・・そういう市民の育成が目指される。

教育的アプローチ

では、この「人」という社会基盤のファクターは、如何につくられているのか。どのようなアプローチがよしとされているのか。「あなた」はどのように創られてきたのか。

情報処理として学習が見直された時代があった。そこでは、知識、技能、リテラシーが教師から transfer されるものとして捉えられていた。これは「伝達モデル」と呼ばれる。学習時の脳内の活動を、コンピュータ処理と類似したものとしてモデル化する立場もある。これに依拠する教育研究では、試行を経てフィードバックし、そのモデルを修正していくというプロセスで真実に近づくという「工学的アプローチ」が採用される。教育活動を「システム」として捉える。もっと古くは、学習者に現れる観察可能な行動のみをもって教育効果を評価するという、「行動主義」と呼ばれる時代もあった。教育研究を「科学」にしようという熱い時代で、一授業の最後に子ども達に「わかったこと」を暗唱させ、「言えた」ことをもって「わかった」とされた。いずれも舶来のアプローチである。

科学的な方法では、明示的な部分のみを取り上げ、見えない部分は扱わなくて良い（否、扱ってはいけない）。範囲を定めてその中で議論する。教室の中で起きている事象にこのやり方を適用すると、見えない重要なファクターを最初から見過ごすことになりかねない。前の時間にある子どもがある事象に気付き、気になりつつ授業に臨んでいることも、教師がそれを見取って気にかけながら授業を進めていることも、研究の対象にされない。

工学的アプローチは、対象に何か悪い点があるのではないか、という前提で事象に対峙する。欠点を明確にしてフィードバックして良くしていこうという戦略で、客観的かつ論理的。エクスキューズを挟む余地もない。塾や予備校であればそれでよい。民主国家にして機会均等が建前であれば必ずついてまわる「競争」の中であるから、これも仕方ない。しかし、このアプローチでは人づくりは成り立たない。子どもに対して「おまえ、ここがダメだ」と繰り返し言ってもうまくいくはずがない。言ってしまった瞬間、その後の対話が遮断されてしまう。全く違うアプローチで行われなければならない。「教育的アプローチ」は他にある。

基本的に褒める。賞賛、尊重する。良い点が必ずあるという前提で進む。伝統的な表現をすれば「仏性」を子どもの中にもみると表現できる。すると、知識の獲得に加えて、その子の中には無意識でも「認められている」という安心感や「認められたい」という感情が湧いてくる。時々悪い点も指摘しつつ、良い方向に向かわせる。他者に認められる経験が極端に少ない子どもの中には、時間が経過して反社会的行動に出てしまう者も出てくるであろう。社会の安全保障には、日々の教育活動が一役かっている。

教師は、いつ言うか、言い方はどうするか。どうしてその子がそう考えたか。その子の置かれた状況はどうか。一瞬の間に多くの要因が頭をよぎり、一瞬の判断で最も適切な表現（指導）をする。「今日は、この子は調子悪いな」、「いつもと違って今日はこんないい点に気付いている。よし、みんなの前で発表させよう」などと判断する。仏教で言う「対機説法」を、教師は常に行っている。「あっ、そうか!」という子どもの一言に、その瞬間に立ち会えた喜びを教師は感じる。

それが、その子どもだけの発見ではなく扱われる。「いま、〇〇さんの言った意味、分か

る人。△△さん、もう一回言ってみて」。クラス「みんな」でつかみとった発見として扱われ、思いついた子ども、個人が賞賛されるだけでなく、「みんなの学び」に貢献する充実感を味わう。人は文脈の中で生きている。小さな「自己実現」と「社会貢献」を積み上げて行く中で、付随的に知識・技能が身に付いてきたとも捉えられる。私たちは友達と共に育まれてきた。「みんなに育てられた」と言っても過言ではない。まさに「学友」である。個人が育まれると同時に、将来の社会が形成されている。

そういった子どもの成長を、それとなくお膳立てする脇役が教師である。教師の巧みは、すぐに答えを言わない。子どもに発見させる。子どもの着想を信じて「待つ」。極端には、「待つ」ことが仕事とも言える。最後は科学的に正しい言葉で閉め、概念や手順を定着させる。

教育的アプローチは職人芸である。逆に、ちょっとした自分の一言が子どもの一生を左右してしまう怖さもある。その責任と重大さを意識しながら、一瞬、一瞬、それまで身につけてきた全てを、全人格をかける。教育とは、全身全霊をかけて他者に臨む人間的な営為の一つで、専門性の非常に高い職業である。

塾の教師は、子どもが問題を解けるようになること、「解法」を身につけること、自分に近づくことを喜びとするのであろう。学校の教師は、そうではない。身につけた能力をもって、その子が将来に出くわす諸問題に対決していく、そういう人間を育てる。自分を越えてもらわねばならない。教師とは、将来の教え子を通して間接的に世界に貢献できることを喜びとする。その日々は「行」であり「道」である。ある大学の教育学部の前には「師道」と書かれた石碑が建っている。また、ある実践家は、子どもと共に探究を進める点をもって、教師と子どもは「同格同行」と言っている（丸本喜一 1998）。

残念なことに、こういった我が国独自と思われる教育実践の様相は、意識されぬまま、顧みられぬまま消えつつある。世の大人はまるで自分が一人の力（と塾講師のおかげ）で成長したと錯覚しやすく、また、教師集団さえも塾世代になって久しいので、いまは先生方も表面的な教育技術に走ることが多い。我が国の文化に基礎づけられた学校教育の教師文化の持続可能性も、大きな問題なのである。

先生の愛情（ここはカットでかまいません）

映画「がばいばーちゃん」で描かれた教師像を紹介しよう。運動会のお弁当のシーンだ。友達の多くが家族と一緒にそれぞれお弁当を校庭で広げる中、祖母の家に預けられ貧乏な生活をしている主人公、明広は、一人教室で弁当を食べようとしていた。弁当の中身が日の丸弁当であると察していた教師がやってきて、「お腹の調子が悪いから、お前のと換えてくれ」という。おかずのない弁当の方がお腹に良いというのだ。開けると、教師が持ってきた弁当は目を見張るほど豪華な弁当だった。その後、同じように腹痛を訴える教師が、何人も弁当片手に明広の教室にやってきて、見る側の笑いを誘う。

これはフィクションなのかもしれないし、美德の押し売りをするつもりもない。しかし、教師の多くは、我が子のように児童・生徒に思いをかける。子どもに意識されようとされ

まいと、ある種の「愛情」の中で次世代が準備されているのは、認めて良い事実であろう。

「融合型多層文明モデル」から

小川正賢氏は、現代の生活世界を「融合型多層文明モデル」として捉える。これは、「我々が先祖代々歴史的に受け継いできているさまざまな生活世界が多層的に融合して構成されている世界だと考えてみるモデル」である（小川 2006; Ogawa 2008）。図のように、「狩猟採集型文明」、「農耕牧畜型文明」、「産業社会型文明」、「情報社会型文明」が、「我々の生活世界に同時に共存していると捉える」。そして、「四つの層の相対的な『厚み』を変化させることによって、世界中のあらゆる地域の生活世界を解読するためのモデルとして活用できるのではないか」と提案する。

ただ元々「このモデルは、現代の多様な生活世界を説明するために構想されたもの」ではなく、「現代の多様な生活世界に生きる人々にとってどのような科学教育がいま求められているのか。それに対する統一的なビジョンを示す」ためのものである。ここで小川氏は、「各層に対応する固有の『価値観』、『規範』、『知恵』、『生業』、『自然理解』それに『教育装置（制度）』を想定し、各文明毎にこういった要素を抽出して組立直す。

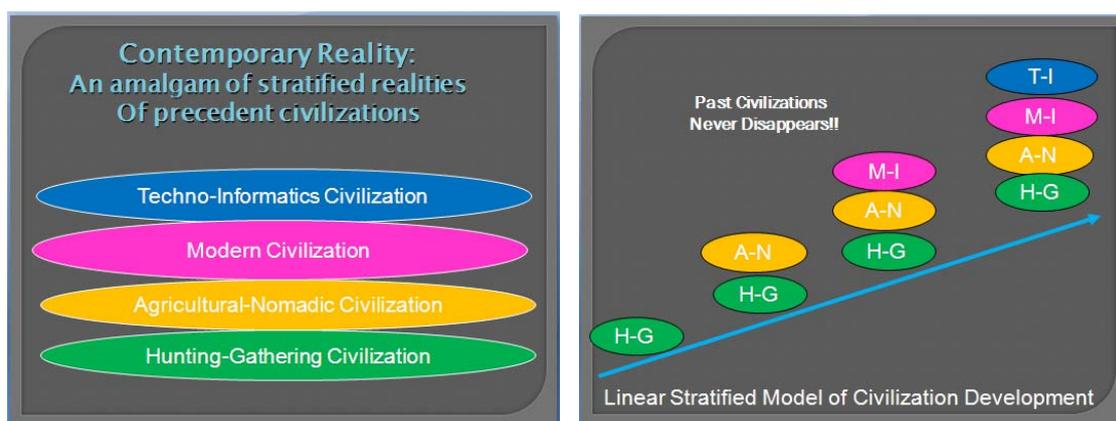


図 Ogawa 2008 より

現代の学校教育制度はこの図では「産業社会型文明」の中で設計されたもので、粗く言ってしまうと、良質な労働者を多量に輩出することを第一にした社会装置である。また、「産業社会型文明」の結果として現在問題になっているのが、地球温暖化に代表される「環境」や「サステイナビリティ」といった議論である。環境の問題もそうであるが、私たちは「情報社会型文明」の教育制度を、文明の多層性に配慮しながら設計する時期に来ているのかも知れない。

そこでは、「環境感受性」といった、見えないものに意識がはたらくような、目の前の一つの寿司ネタからフードマイレージ、さらには、万物のつながりに思いを馳せるような（これは華嚴の思想と言えようか）「力」をもった市民の育成が求められているのではないだろうか。これは、舶来起源ではない。我が国の教育は、世界に追いつくことを目指すのでは

なく、世界をリードしなければならない。

参考文献

丸本喜一 (1998.--) 『ここが理科指導のポイントだ』 明治図書

小川正賢 (2006.3) 『科学と教育のはざままで』 東洋館出版社.

Ogawa, M. (2008.10). Science education Japanized and education of Japanese indigenous science. Invited Keynote Lecture at International Academic Conference of Indigenous Science and Mathematics Education, National Taitung University, Taitung, Taiwan.